

学校長からみた音楽アウトリーチの効果

—学校内外の連携にも着目して—

小野 隆 洋 上 村 有 平

1. 問題と目的

文化芸術体験事業とは

わが国では1990年代後半から20年あまりの間、アウトリーチが活発化してきた(上村・小野, 2021)¹⁾。このアウトリーチを後押ししてきた事業の1つとして文化庁の文化芸術体験事業が挙げられる。2020年度現在、文化庁が行っている「文化芸術による子供育成総合事業」^{註1)}は、2つの領域に大別される。

1つ目は、オーケストラが全国の小・中学校に出向いて体育館等で演奏会を行う巡回公演である。この巡回公演の特徴は、公演当日にオーケストラが初めて学校を訪れるのではなく、事前に団体から6人以下の演奏者やスタッフが学校に出向き、児童・生徒とのコミュニケーションを図りながら音楽に親しみを持ってもらうようなワークショップを行う。こうしてオーケストラと児童・生徒との間に一定の関係性を構築した上で、実際にオーケストラが学校に訪問して公演が行われるものである(赤木, 2014)²⁾。

2つ目は、芸術家個人が小・中・高等学校等に出向く芸術家の派遣事業である。個人または少人数(最大6人)が学校に派遣され、実技披露、講話、ワークショップ等を行うもので、1校につき年間3回まで実施することができる。実施されている分野は、音楽、演劇、舞踊、大衆芸能、美術、伝統芸能、文学、生活文化、メディア芸術など多岐に亘る。

文化芸術体験事業における学校長の役割

芸術家の派遣事業は、文化庁が金銭的な負担を負うものの、実際に内容を決め、芸術家と交渉した上で応募し、その後のすべての準備と実施するのは学校である。具体的な日程、時間、参加対象者、実施内容等の詳細についても、学校と芸術家の間で協議をして決定していくのである。つまり事業実施の是非は、国でも芸術家でもなく学校側に委ねられているのである。文化庁は財源を国から確保し、学校からの申請に基づいて書類を精

査・採択することで学校を支援するものの、あくまで活動促進のための役割を果たすにすぎない。このように学校の裁量に任された性質をもつ文化芸術体験事業において、事業実施の決定権を握っているのが、学校組織の長たる学校長である。すなわち、まずは学校長が事業に価値を見出さない限りは事業が成立しないのである。

本研究の第一著者も、2001年～2003年まで、文化庁が派遣する在外芸術家研究員としてフランスで音楽演奏家としての研鑽を積んだ後、帰国後もなく芸術家の派遣事業に従事するようになった。17年間で延べ1000公演以上を行い、本事業で関わった児童生徒は延べ10万人を超える。活動を始めた2003年当時は、音楽科の担当教諭やPTAの保護者らが実施を強く希望しても、学校長の許可が得られず申請に辿り着けないことが少なくなかった。また、何とか実施にこぎつけた場合でも、事業の継続となるとさらに難しく、学校長の理解を得られなければ単発の実施で終わってしまう。

吉本(2013)³⁾は、音楽アウトリーチが現代の子どもに不足しがちなコミュニケーション能力を養う効果があると言われるものの、学校で実施する場合に直面する最も大きなハードルは学校側の理解不足だと指摘している。とりわけ学校教員が重きを置いているのが、学習指導要領における位置づけ(伊志嶺, 2018)⁴⁾、すなわち音楽科の授業として成立するかという問題である。こうした学校側の理解不足を解消する上で鍵となるのが、まさに学校長なのである。

このように、文化芸術体験事業の実施において学校長は決定的な役割を担っている。しかしながら、音楽アウトリーチの効果について、その対象となる子どもや保護者、地域への効果を検討した研究は散見される一方、学校長に着目した研究はほとんどみられない。(財)地域創造(2010)⁵⁾の調査、あるいは文化芸術体験事業の報告書(三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株), 2020)⁶⁾など、学校単位を対象にした調査結果から間接的にうか

がい知れるのみである。それゆえ、文化芸術体験事業においてキーパーソンとなる学校長が、文化芸術体験事業や音楽アウトリーチの効果をどのようにとらえ、学校経営に取り入れているのかを検討することは極めて意義があるといえよう。

学校長に特徴的な視点

第一著者が音楽アウトリーチに従事する中で、学校側の事業担当者、音楽主任、クラス担任、学校長等、様々な立場の教員と本事業の教育効果や意義について議論を重ねてきた。その中で、各々の立場によって、この事業に対する視点は異なることが示唆された。

そこで小野 (2020)⁷⁾ では、音楽アウトリーチの意義について、クラス担任や音楽主任を務める教員を対象に面接調査を行った。その結果、クラス担任は子どもの個々の様子やその後の音楽に対する態度の変容に、音楽主任は子どもたちの演奏技術や表現力の向上といった音楽的な側面の発展に目を向けていた。

これに対し、音楽アウトリーチ実施校の校長らと議論する中で、学校長たちが重きを置いているのはクラスや学年、学校全体の雰囲気の変容など、集団における相互作用や学校経営の視点にあることが示唆された。学校長は学校という1つの社会

の長であり、経営者でもある。子どもたち個々の音楽レベル向上にくわえて、集団のまとまりや学校全体をよくしたいという学校経営の視点からこの事業を活用することを試みていると考えられる。

音楽アウトリーチの効果に関わる要素を、Bronfenbrenner (1979)⁸⁾などを参考に整理すると、次の4つの要素に大別される(図1)。

- a. 子どもの個人内プロセス
- b. クラス内の相互作用
- c. 学校内(他クラス、教職員)の相互作用
- d. 家庭・地域との相互作用

この4要素の中で、クラス担任は主に自分のクラスの子どもたちへの視点、すなわち「a. 子ども個人」「b. クラス集団」への着目を中心とする傾向がある。一方、学校長は「学校」単位の巨視的な視点、すなわち「c. 学校内(他クラス、教職員)の相互作用」「d. 家庭・地域との相互作用」も視野に入れていることがうかがえるのである。

本研究の目的

本研究では、音楽アウトリーチ実施校の小学校長1名に半構造化面接を行い、音楽アウトリーチが子どもやクラス集団、学校全体に及ぼす効果や教育的意義について、学校長の視点から検討する

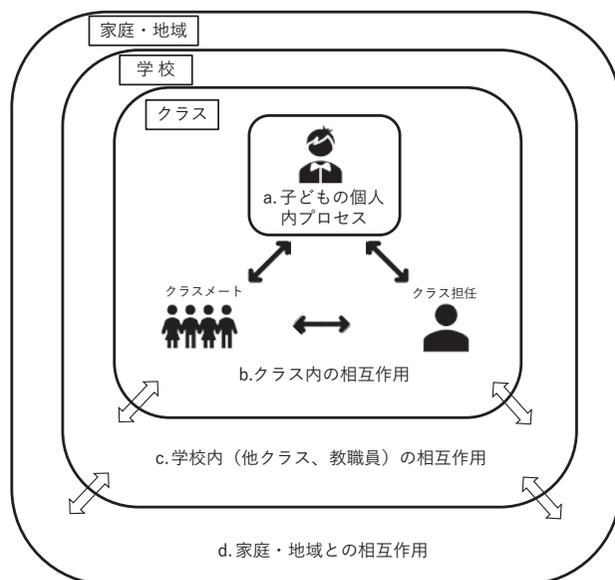


図1 音楽アウトリーチの効果に関わる要素

ことを目的とする。ただし、単一事例を取り上げての検討となるため、一般化可能性には限界がある。しかしながら、音楽アウトリーチが一定以上の成果をあげている学校の事例を取りあげることで、その成功要因および効果を促進するメカニズムについて詳細に検討することが可能になる。これにより、音楽アウトリーチ実践がより効果的に機能する実践デザインの検討にもつながると考えられる。

2. 方法

調査協力者 山口県内の公立小学校校長1名。調査協力者（以下、A校長）は、前任校でも継続的に芸術家の派遣事業を実施していた。異動後の学校（以下、A小学校）においても着任した年に申請を行い、2年間にわたって継続して事業を実施している。

A小学校は全校児童が30人以下の小規模の小学校である。毎年11月には市の教育委員会が主催する音楽祭に全校で参加し、全校児童（第1学年～第6学年）による合唱と合奏を披露している。

調査時期 2018年11月

調査内容 半構造化面接を行った。内容はおよそ次の通りである。

①音楽アウトリーチの効果

- ・事業の実施前：子どもの普段の様子、音楽への関心・意欲・態度、授業の様子など
- ・事業の実施時：学校長が観察して印象に残ったこと
- ・事業の実施後：子どもの変化や事業の効果

②音楽アウトリーチ全般に対する学校長の意識

また、事前に面接内容をA校長に連絡したところ、面接当日にテキスト媒体でも回答が得られたため、適宜参照して分析していく。

音楽アウトリーチにおけるワークショップ型授業の代表的な実施概要は、表1に示す。文化芸術体験事業における各学校での実施回数、実施時間の制限から、多くの子どもたちはa～eのプロ音楽家の演奏を鑑賞する音楽鑑賞会や講話、楽器体験学習がメインとなる（上村・小野, 2021）¹⁾。本研究のA小学校では、この鑑賞活動を土台に、音楽祭に向けて、f・gのように合唱や合奏などの音楽表現活動に対して音楽実技指導を行った。

倫理的配慮 調査目的についての説明を事前に行い、学校長の同意を得た上で実施した。

3. 結果と考察

調査内容①が音楽アウトリーチの効果に関わり、調査内容②が音楽アウトリーチのあり方に関係する。そこで①について音楽アウトリーチの効果に関わる要素（図1）の4つに分類した後、要素ごとにKJ法（川喜田, 1967）⁹⁾をもとにカテゴリ分類した（表2）。

表1 ワークショップ型授業の実施概要

a	各学年に応じたプログラム：トロンボーン、声楽、ピアノ、フルート、打楽器、マリンバ、鍵盤ハーモニカ、リコーダーによる演奏の鑑賞
b	鑑賞曲目が作曲された経緯やその作曲者まつわるエピソードの解説
c	金管楽器、木管楽器、打楽器の音の出る仕組みや演奏方法に関する解説
d	児童による金管楽器、木管楽器、打楽器の演奏体験学習
e	音楽家に対する児童からの質問への応答
f	発声指導、及び教科書教材を題材とした楽曲の歌唱指導
g	ワークショップにおける音楽祭等に向けた児童による器楽合奏の実技指導

表2 音楽アウトリーチの効果

[a.子どもの個人内プロセス]
子どもの個人レベルの変化
知識及び技能
思考力・判断力・表現力等
学びに向かう力、人間性等
[b.クラス内の相互作用]
子ども同士の相互作用の促進
学級風土の変化
クラス担任の変化
[c.学校内（他クラス、教職員）の相互作用]
他クラス・他学年との交流促進
クラス外の教職員との交流促進
学校風土の変化
[d.家庭・地域との相互作用]
子どもと保護者のコミュニケーション促進
学校と家庭との連携強化
地域の文化レベルの向上

「a.子どもの個人内プロセス」からは「子どもの個人レベルの変化」として様々な要素が抽出された。学習指導要領に則った音楽科の授業として成立することも確認するため、伊志嶺 (2018)⁴⁾ にならない文部科学省の新学習指導要領にある3つの資質・能力「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」に沿って下位カテゴリに分類した。また、「b.クラス内の相互作用」からは「子ども同士の相互作用の促進」「学級風土の変化」「クラス担任の変化」、 「c.学校内(他クラス、教職員)の相互作用」からは「他クラス・他学年との交流促進」「クラス外の教職員との交流促進」「学校風土の変化」、 「d.家庭・地域との相互作用」からは「子どもと保護者のコミュニケーション促進」「学校と家庭との連携強化」「地域の文化レベルの向上」がそれぞれ分類された。

なお、面接データのテキスト表示については、インタビュー者の発言を「I」、調査協力者の発言を「A」、面接当日に寄せられたテキスト媒体での回答を「a」で示す。固有名詞については任意のアルファベットに置き換えた。括弧書きおよび下線は筆者らによるものである。

(1) 子どもの個人内プロセス

「子どもの個人レベルの変化」については、文部科学省の新学習指導要領の3つの資質・能力「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」に沿って下位カテゴリに分類した。

3つの資質・能力について、音楽科教育においては教科の目標として以下のように定義されている。

文部科学省 (2018)¹⁰⁾：小学校学習指導要領

表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解するとともに、表したい音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。【知識及び技能】

(2) 音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聴くことができるようにする。【思考

力・判断力・表現力等】

(3) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培う。【学びに向かう力、人間性等】

注：【 】 部分は筆者らによる。

これら3つの相互関係について、たとえば久保田 (2019)¹¹⁾ は、音楽の授業で「主体的・対話的で深い学び」を実現するには、その記載順ではなく、逆の順番で実践することを提案している。すなわち、音楽の世界への入り口は、子ども個人の「私」としての心が動き、関心・意欲・態度といった「学びに向かう力、人間性等」が喚起されることが何よりも重要となる。こうした音楽への学びに向かう力があるからこそ、より深く感じたり判断したりする「思考力・判断力・表現力等」の育成につながり、それが生きてはたらく「知識及び技能」にもつながっていくというのである。そこで本研究でも、「学びに向かう力、人間性等」「思考力・判断力・表現力等」「知識及び技能」の順に検討をすすめていく。

1) 学びに向かう力、人間性等に関わる変化

A小学校では、月ごとに「今月の歌」を設定して朝の会で歌うなど、授業以外にも日常的に音楽に触れる機会が設けられている。しかし音楽アウトリーチを実施するまでは、器楽演奏は好むものの、歌唱活動を好まない子どもが比較的多かったようである。

a 今年度は、どの学級でも、音楽の時間だけでなく、朝の会での今月の歌も楽しく行っている。昨年度まで、合奏は好きだが、歌うことが好きでない児童が比較的多かった。

その後、音楽アウトリーチによって子どもの歌唱活動に対する取り組みが変容したことが、次のように具体的な行動として現れるようになったという。

A 子どもが一番変わったのが、児童クラブ（筆者注：学校敷地内の学童）に行き、歌ってるんですよ。「君をのせて」（筆者注：曲名）を何回も何回も。

I そうなんですか。それは自分たちから。
A 先生たちが何を言ったわけでもなくて、聞いたなら児童クラブに「ただいま」って帰ったら歌ってるんですよ。今までのA小にはありえない。2年前にO先生に来てもらって、「歌わない、音楽が嫌い」っていう子どもたちだったのが、歌ってるんですよ。児童クラブの先生がびっくりしています。

A 何か楽しめ出したかなっていう。

I ああ～、はい。

A 今、実は昼休みも音楽祭の途中ぐらいから、昼休み歌ったりリコーダー吹いたりオルガン弾く子がいるんですよ。

I あ、そうなんですか。自らですか。

A 自ら。じゃけ、外に出ないという欠点はあるんですけど、遊びに。(中略) そういう風に何かこう、日常生活の中に音楽ができたのかなっていうのでありますよね。

以前は音楽を好まなかった子どもが、昼休みや放課後の児童クラブなど、授業外において自主的な学習を行っている様子がうかがえる。このように授業外での主体的な活動を通して、日常的に学ぶ姿勢が習慣づけられることは、音楽への興味の質が、状況的興味から個人的興味に深化していると評価できる (Renninger & Hidi, 2016; 上村・小野, 2021)^{12) 1)}。すなわち、音楽の授業だから歌うといった状況によって規定されていた興味 (状況的興味) が、授業という状況がなくても自発的に音楽を鑑賞したり練習に取り組んだりする興味 (個人的興味) に深化したといえる。

また、興味の質が変化することは、学びに向かう力としても非常に意義がある。田中・市川 (2017)¹³⁾によると、浅い状況的興味の場合、興味はポジ

ティブ感情にのみもつづいて生起しているため、困難に直面してポジティブ感情が生起しなくなった場合、興味が消失して積極的姿勢が持続しない。一方で、深い個人的興味を抱いている場合には、たとえ困難に直面してネガティブ感情が生起したとしても、課題に取り組むこと自体に価値を感じているため、積極的な取り組みが持続するという。このように興味が深化することは、音楽に対する取り組みの持続性、および音楽への価値の認知 (音楽を重要視すること) をともなうため、学びに向かう力として重要な意味をもつ。

このように学びに向かう力が変容した要因の1つとして、A校長は「本物に触れる」ことの重要性を次のように指摘している。

A 子どもに体験させるクラスって大きいね。実際楽器を叩くとか、吹くとか。あのトロンボーンができて音が出た時の喜びっっちゃうか、笑顔がね、忘れられない。

I 見てる人も、皆なんか「あれー」みたいなあれがありますよね。

A 本物の楽器に触るっていいですよ、やっぱりね。

A あの鑑賞会で良いのは、本物を目の前で、贅沢に見せてもらえる。で何か45分よりもっと時間が有れば、弾きたい演奏したい、トロンボーンがやっぱり吹きたいんだそうです。

「本物に触れる」ことの意義については、音楽アウトリーチに関するこれまでの研究でもくり返し指摘されており (e.g., 林, 2002; 伊志嶺, 2018; (財)地域創造, 2010)^{14) 4) 5)}、A校長も、様々な楽器の実物が子どもたちの目の前にあり、実際に触れたり体験したりできるところに意義を見出している。

また、子どもの変化の中でも特筆すべきは、歌唱練習に意欲的でなかった子どもにまで好意的な変容が見られたことである。

A 子どもたちの力がついたのが何でわかったっていうと、やっぱりこの練習を嫌が

らんようになったちゅうのが、去年やって分かったように、練習時に歌いだすとこんな態度でシラケたやつがおったでしょ。そんな子が居なくなったというのが大きいですね。去年あのシラケた中で、今の6年も5年の時に本当に無表情だったでしょ。

I ああ、表情が。

A 今年豊かやったですよね。それは本当大きいですね。2年の積み重ねです。

無表情であった子どもの表情が豊かになったということは、様々な教育的意味を持つ。音楽的な側面からみると、表情の豊かさは学びに向かう力の現れであるだけでなく、表現力と技能の向上にもつながっていく。さらに、技術面からみると、仮に表情が硬ければ、豊かな表情で歌唱するとき比べて音の響きが減少する可能性が考えられる。それゆえ、子どもに豊かな表情がみられるようになったことは、「学びに向かう力」「表現力」「技能」と3つの資質・能力すべてに関わるものとして評価できるのである。また、コミュニケーション力の観点からも、表情が豊かになることで自己表現が円滑に行え、他者との関係性を良好に保つことで人間性の涵養にも貢献できると考えられる。

2) 思考力・判断力・表現力等に関わる変化

音楽科教育における2大領域の「鑑賞」と「表現」を比較すると、鑑賞活動において他者の表現を観たり聴いたりすることは、一般に受動的で非創造的なものとしてとらえられやすい。しかし、鑑賞 (appreciation) は普段の生活でBGMとして音楽を聞き流す行為とは異なり、3つの資質・能力の1つ「思考力・判断力・表現力等」に深く関わる能動的な活動であると考えられる。なぜなら、A校長の次の言葉にも出てくる「予想をしながら聴く」という行為は、鑑賞を行う前から頭の中に既にストーリー性が存在し、それに基づいて楽曲を評価 (appreciation) しているからである。

A 今までは、1回目はただこうお客様だったのが、2年目になると予想して聴く。何が始まるかっていうのを聴く。そういうのがやっぱり、楽しみ方のレベルが上

がったんじゃないかと思うんですよ。

I だから聴き方も含めて。

A そう。そういう予測して聴くことで、鑑賞を楽しめるレベルが上がったのかなっていうのはありますよね。

A校長も「楽しみ方のレベルが上がった」と評しているように、鑑賞能力が養われ、音楽を評価しながらより高い次元で鑑賞できるようになったことが示唆されている。鑑賞と評価が、英語では同語の「appreciation」であるように、鑑賞はまさに思考力・判断力といった評価をとまなう能動的な活動であることが指摘できよう。

さらに、この鑑賞活動は表現活動にも影響を与えていく。A校長も、最も向上した能力として、伝えようとする気持ちや上達しようとする意欲による技能の高まりを挙げている。

A この文化芸術活動で何が最も向上したかとか、子どもが成長したかって言われるとですね、一番は、音楽をとにかく伝えようっていう気持ち、それとか、上手くなりたいっていう技能面の高まり・・・何かこう、すごく自分なりにできたっていうのが大きいですね。できた、自信になったっていうかすごい・・・。

「伝えたい」「上手になりたい」という気持ちが、子どもの表現力向上に寄与することを示唆する言及である。また、できたと認識することによって自信 (有能感) が高まっている可能性についても指摘している。すなわち技能が高まることで、他者に伝える力 (発信力) にくわえ、自信も養われているというのである。

また、A校長は表現力に関わる声や身体の変化についても指摘している。

A 小さい声じゃなくて大きな声で歌ってるんですよ、児童クラブで。

A 歌ってる時も演奏してる時も、身体で表

現できるのが出てきましたよ。こんなかね自然と。

大きな声や身体全体での表現は、内面から湧き出るエネルギーの発露であり、思いを他者に伝える力が形成されてきたことの現れでもある。また、大きな声や身体全体で表現できるというのは、音楽に対する自信だけでなく、大きな声で歌ってもクラスメートから奇異な目で見られることがないという関係性が前提にあるからこそ可能になる。すなわち、良好なクラス集団、そしてそのクラス集団において、合唱・合奏への価値づけやモラル（士気）が形成されているからこそ成立する表現力なのである。

一方で、ひたすら全力で声や音を出せばよいのではなく、思考力や判断力を駆使して他者と調整していく中で培われる表現力についても言及している。

- A やっぱ音楽を通して発信するとか、自分の思いとか曲を伝えるっていう力。おそらくそういうのが大事やなと思う。
- I 毎回発信して。
- A いろんな所で発信する。合奏でも自分のパートのところで、ここだっていうところ多分ティンパニーとか叩くじゃないですか、ああいうことか。俺のメインのパートはここだーっていう。そういうのが発信力に繋がるなあとと思って。
- I そうですよ。全部が全部全力じゃなくても。
- A じゃない。
- I それぞれやっぱあるから。
- A 小学校で自分がこう今、子どもにいうのも、いつも何でもかんでもしゃべって伝えるんじゃないで、自分の一番伝えたいものは何かっていうことを子どもに言う。日常生活とか勉強でもいいよって、そういうことを伝えないと意味がない。
- I 一番伝えたいことは何か。
- A それが人に訴える力になってるんですよ。じゃけー、そこを音楽でつけれると思っちゃるんですよ。

ここでA校長の言葉にある発信力とは、自分の意見や考えを他者に伝えるための能力であり、自らが一方的に表現するだけでなく、他者のことを考えながら伝えることが重要になる。すなわち発信力には、他者を尊重しつつ自分の思いを吟味して表現する思考力・判断力も求められる。このように発信力は、「思考力・判断力・表現力等」すべてをバランスよく発揮する力としても捉えられ、音楽アウトリーチがその能力促進に寄与することを期待していることが確認できる。

この発信力はまた、集団内で自己と他者を調整していく力でもあり、子どもの集団づくりにつながっていく視点を内包している。この点については「(2) クラス内の相互作用」の項で詳述する。

3) 知識及び技能に関わる変化

「知識及び技能」に関わる変化については、音楽科教育における「鑑賞」と「表現」の領域にわけて検討していく。まず鑑賞活動における変化について、A校長は次のように語っている。

- A 何が違うかという、音楽の授業で先生たちが演奏してもらったり合奏してもらったりした曲が流れると、「あーあーあー」とか言いながら「これだ！」とか言うんですって。
- I 覚えてて。
- A 全部覚えてる。なので、すごいその曲を楽しんでいるか。これはね、今の授業でも担任喜んでいます。

- A 高学年はやっぱあの、O先生に時代背景を説明してもらうじゃないですか。作曲家はこういう時代で、ということで何かイメージしやすいって言ってました、子どもが。
- I 曲の解釈。
- A 解釈は低学年は言わないし、その辺は分からないんですけど。高学年は考えて聴けるって言ってました、子どもが。

音楽家による解説付きの演奏を鑑賞したことで、

作品への知識・理解が一層深まり、その後の授業で同一の作品を再び鑑賞する際には、既知の音楽としての認識がある。それゆえ、初めて聴く曲とは違い、その時点でエントリーポイント（芸術と自分との深い関わりのこと）が存在しているため、より能動的に鑑賞することが可能になる。また、曲や作曲家の時代背景の知識によって、「イメージ」を喚起し、思考力や判断力を伴う深い鑑賞活動の一助になることも指摘されている。また、学年によって鑑賞の観点・方法に違いがあることも示唆されている。この音楽アウトリーチの対象学年に応じたプログラム編成（表1）が効果的に機能していることがうかがえる。

さらにA校長は、子どもの表現活動につながる鑑賞活動の効果にも言及している。

A 目の前で見て5人、6人の先生方が演奏する時に、指揮者がいないんだけど、みんなが目と身体でタイミングとってるでしょ。あれが伝わってるんです、子どもに。そうやっているんな人と心を合わせるよってというのが、学んでるんですよ、子どもが。確かに見てるなって思っ

生演奏を鑑賞する中で、複数人が指揮者なしでタイミングを合わせていること、すなわち演奏技能だけでなく、音楽を媒介として人と人が心を通わせているところに子どもたちが着目している様子が指摘されている。

次に表現活動における知識及び技能に関わる変化について、A校長は次のように語っている。

A O先生たちの合唱の指導を受けて、言葉を大事にとか、どう伝えるのかというあたりを教えてもらってるじゃないですか。それによって、なんかね自分たちがうまくなっているっていうことを自覚しちゃうんですよ。うまくなってると思ってるんですよ、自分たちが。

A 専門的な立場から指導してもらって大きいですね。今回も合奏でもそれぞれ

のパートでついてもらって、ただ同じ音を出すんじゃないかとね。あのあたりも全然違いますよね。歌うのでも、やっぱり言葉に意識するようになってるんですよ、お陰で。言葉を大事にせいと言われてるんで。どう伝えるかというあたりがね。

楽器奏法や歌唱方法など、技能に関わる知識が高まることで、結果的に技能が高まり、表現力が向上するという「知識」と「技能」の相乗効果が見られる。すなわち、知識・技能が表現力の向上に寄与していることがうかがえる。

McPherson, Nielsen, & Renwick (2013)¹⁵⁾によると、音楽の初心者の多くは、自身の演奏のどこがうまくいっていないか自覚できていない可能性があるという。自身の成し遂げようとしている演奏と「現在」の演奏とを比較するためには、どこが間違っているかをモニターして特定する必要があるものの、そのような能力が十分発達していない (Barry & Hallam, 2002)¹⁶⁾。その結果、上級者のように演奏を改善するための特別なやり方（方略）を使わず、機械的に「とおして演奏する」傾向があり (McPherson & Renwick, 2011)¹⁷⁾、初心者特有の効率の悪い学習とされている。それゆえ音楽家が子どもの演奏を実際に模倣し、良い見本と合わせて言語も用いて説明を加えることで、子どもは現在の自己を客観的に観察し、改善に向けての「知識及び技能」をセットにした方略を学ぶことが効果的なのである。

(2) クラス内の相互作用

クラス内の相互作用、すなわちクラス集団のグループダイナミクス（集団力学）に関わる要素としては、表2のように「子ども同士の相互作用の促進」「学級風土の変化」「クラス担任の変化」の3つの下位カテゴリに分類されたため、それぞれについて検討する。

1) 子ども同士の相互作用の促進

音楽アウトリーチにおけるワークショップ型授業のように、仲間と協同して学ぶことには大きく2つの効果があるとされている。1つは学習の成

果を促進する効果、もう1つは対人関係や社会性の育成に与える効果である(瀬尾, 2016)¹⁸⁾。A校長の話からも、子ども同士の相互作用を通して生じた音楽の学習成果が、対人関係や社会性の向上と密接に関係していることをうかがわせる。

- A 今までは自分のとこ演奏して終わり、自分の歌うたって終わりだったのが、お互いの声を聞いたりとか、お互いの音を聞くようになった、聞こうとする。やっぱそれ、O先生から聞かって言われたんですよね、別のパートを。それは大きいですよね。
- I よく聞いてじゃなくて、実際に聞かってことですよね。
- A 確かに聞いているねって思って。特にドラムの子なんかでも、聞きながら強弱つけてますよね。四拍とか。
- I ちゃんと周りを
- A 見てるな聞いているなって思って。
- I 演奏しながら。でも聞く力は大事ですよね。
- A 大事ですね。これ他の勉強にも生きてきますよね。何にでも聞くっちゃうことは大事。

合奏は複数人で1つの楽曲に取り組むため、A校長が指摘するように「お互いの音を聞く」ことが求められる。特に音楽の特性上、同じテンポ感(ビート感覚)を共有することが極めて重要で、そのために他者の奏でる音に傾聴することが必要不可欠である。他者を「見る」「聞く」ことは、他者を尊重し、協力し合う行為でもある。すなわち、合奏という音楽表現活動によって、子どもの協調性やコミュニケーション能力の向上にもつながっていくと考えられる。

このことを裏づける議論を寺澤ら(2013)¹⁹⁾が展開している。アンサンブル(合唱や合奏など2人以上で演奏すること)演奏では、複数人が音楽を聴取しながら、協調的な運動動作によって演奏を行い、それに伴う音楽の変容に適応した演奏をさらに生み出す、という循環的な構造がみられる。そこでは、言葉や指揮者による指示なしに、周囲の様子を敏感に感じ取り、それに適応した形で自

発的に音楽生成に参加・貢献していく高度で社会的なプロセスが存在するというのである。

このように高度な社会的プロセスを合奏や合唱の活動をととして経験するからこそ、子どもの社会性の育成につながっていくものと考えられる。これがまさにA校長が指摘する「他の勉強にも生きてくる」ことといえよう。

2) 学級風土の変化

さらにA校長は、子どもの集団づくり、人間関係づくりといった学級経営の視点からも音楽アウトリーチを評価している。

- I 全体をこう見て、その中で自分がどういう役割で、全体の中での立ち位置ってどうか。その中できちんと発信していくっていうのが大事なのかな。
- A それがですね学級の中でも、人間関係でもそうですよね。そういうことなんですよ。学級づくりしていく中でもやっぱり音楽と一筋で、人が何考えているのか。何を言ってるのか、何を伝えているのかっていうのを、感じて聞かなきゃ駄目なんですよね。そういう意味で、学級づくりにも使えるっていうのがあるんですよ。よく担任の朝の会の言葉にも出てますよね。ちゃんと。やっぱほんと人間関係づくりとか、集団づくりとか、それに音楽って大事だなあっていうのは思いますね。

音楽表現活動を通して培われる能力は、演奏に必要な音楽的な能力のみでないことがくり返し強調されている。とりわけ、クラス集団の中で自分がどういう役割・立ち位置かを確認して発信していくことは、音楽にとどまらず、クラス内の良好な人間関係を構築していくためにも重要になる。そしてこれがまさに、学級づくり、集団づくりにもつながっていくというのである。

これに関連して、先ほどの寺澤ら(2013)¹⁹⁾は、身体の生理的状態が変化することで、情動が喚起されるというジェームズ=ランゲ説(筆者注:「悲しいから泣く」というように情動が身体的反応を誘発するのではなく、「泣くから悲しい」のよう

に、身体的変容によって情動が喚起されると考える説)を引き合いにしながら、次のように指摘している(下線は筆者らによる)。

音楽によって感じられる情動は、自然な身体動作によって強められると考えられる。しかも、音楽は時間芸術であるため、情動の強まりや弱まりといった「音楽情動の概形」は音楽のタイミングに同期して共有される。つまり、音楽を介して仲間とともに身体動作を共有することは、情動の同期と共有をもたらしのである。たとえば「仲間と一緒に盛り上がる喜び」といった現象も、このようなメカニズムで説明できるであろう。

ここでの議論は、一般的によくされる「クラスの心が1つになるからこそ良い表現が成立する」というものではない。合唱や合奏による身体動作の共有を契機として、結果的にクラスの気持ちが1つになるといった情動面の変化が生まれるということなのである。つまり、合唱や合奏という活動そのものに、子ども同士の気持ちをつなぐ機能が多分に存在すると考えられるのである。さらに日々の練習において、クラスの気持ちが1つになることをくり返す中で、学級風土(雰囲気)も変化していくのである。

この学級風土(本事例では学校風土も含む)の変化に大きく寄与したことから、A校長は音楽祭という「ゴール」の存在が、子どもたちのまとめ(集団凝集性)を高めたと評している。

A ゴールがあって、それに向けてO先生から曲も選曲してもらって、それからスタートしていくので。やっぱり2ヶ月かけて作り上げていく。

I あの曲良かった。

A 本当あの曲良かったです。「BOM-BA-YE」

I 「BON-BA-YE」シンクロの曲。

A すっごい良かったです。

I いや何か、すっごいこう1回目の時、ちょっとですっごい変わったし、何かこう6学年がみんなで1つでこう。

A そうなんですよ。

実際、音楽会などの共通の目標(ゴール)があることは、クラスや学校の集団機能を向上させる上で極めて重要な意味をもつ。杉江(2013)²⁰⁾によると、Bass(1962)²¹⁾は集団を「人間関係志向的集団」と「課題解決志向的集団」の2種類に区別している。前者は仲良し関係で結ばれた集団であり、後者は課題のよりよい達成をめざして結ばれた集団である。人間関係志向的集団の成員は人間関係を維持するための気遣いに重点を置いており、仲良くすること、その場の空気・雰囲気を乱さないことが主目的となり、目標達成に向けての高め合いや鍛え合いが難しくなる。これに対し、音楽会などの共通目標があることは、集団として課題のよりよい達成をめざす課題解決志向的集団を形成しやすくなるのである。つまり、「金賞をとる」「よりよい発表にする」などの共通目標があるからこそ、子どもたちは1つになりやすいのである。

また、課題解決志向的集団のポイントは、メンバー間の良好な関係が前提にないと形成されない点にある。それゆえ、課題解決志向的集団をめざすことで、結果的にはクラス内の良好な関係も構築されていくのである(赤坂, 2013; 上村, 2018)^{22) 23)}。そして寺澤ら(2013)¹⁹⁾が指摘するように、音楽によって動作を仲間と共有し、良好な情動状態を保ちながらともにゴールを達成することで、さらなる一体感や結束感が生まれていく。

A校長は、これらのプロセスをより促進させるため、音楽アウトリーチを音楽祭の前に意図的に設定しているという。

I やはりその音楽祭があるからこそやっぱり、タイミングが。

A 目的があるから、文化芸術活動を音楽祭の前に持つてくるという価値はすっごく高いと思いますよ。

つまりA校長は、音楽祭を成功させるという目的達成のために音楽アウトリーチを実施するタイミングを計り、その効果を存分に発揮させているといえる。

3) クラス担任の変化

音楽アウトリーチの対象はあくまで子どもであ

るものの、クラス担任にも大きな効果を及ぼしていく。特に、小学校教員は専門的な音楽指導において、他の学校種と異なる特有の困難さを抱えている。なぜなら、小学校教員は全教科の指導にあたるため、中学校・高校の音楽科の教員と違い、音楽科の教員免許を有しているわけではないからである。この問題について椎葉・菅(2019)²⁴⁾は次のように指摘している。

大学での教員養成以外に専門的な音楽教育を受けたことがない教師にとって、歌唱を指導することは特に難しい。なぜなら、発声する際に使用する横隔膜や声帯など、直接は観察することのできない器官のコントロールを求められるスキルだからである。そのような状況であっても、学習発表会や音楽大会など児童が大勢の前で発表する場面は数多くあり、音楽専科ではない教員が、それらの指導をゆだねられることは精神的に大きな負担となることが少なくない。

そこで、音楽アウトリーチがクラス担任に及ぼす効果について、鑑賞と表現それぞれの領域について検討していく。

まず鑑賞活動においては、A校長が指摘するように、授業ではどうしてもCDによる鑑賞となってしまう。しかし、プロの生演奏を鑑賞することで、子どもにとって深い感動や学びの機会になるという。

a 以前は、鑑賞の時間には、CDによる鑑賞であったが、本物の楽器でプロの音楽家による演奏で、子どもたちは心も表情もきらきら輝かせて、楽しんでいる。

さらに生演奏は、クラス担任がその後に行う授業にも大きな効果を及ぼしていくというのである。

A 何が違うかという、音楽の授業で先生たちが演奏してもらったり合奏してもらったりした曲が流れると、「あーあーあー」とか言いながら「これだ!」とか言うんですって。
I 覚えてて。
A 全部覚えてる。なので、すごいその曲を

楽しむっていうか。これはね、今の授業でも担任喜んでます。

つまり、その後の授業において、音楽アウトリーチが他に代えがたい「導入」となり、クラス担任にとっては、鑑賞活動を展開しやすくなるのである。

さらにA校長は、クラス担任の変化についても語っている。

A もっと上手になりたいって追及能力っていうか、子どもなりにね、それはあるんじゃないかあとと思います。まあその陰には、担任ももっと上手になりたいっていうのがあるので。でもO先生に指導しなかったらそこまできかないので。やっぱ専門的なところがわからないので、小学校の教員は特に。

a 専門的な立場からの指導、声の出し方、言葉を大切にすること、音楽の伝え方などを指導していただける。

ここでA校長も、小学校教員に特有の問題として専門的な音楽指導の困難さを挙げ、それゆえに音楽家の指導がクラス担任の音楽指導力の向上にもつながるといっているのである。

a 次の指導までに、先生方から学んだことを児童はもちろん、教職員がきちんと指導するようになっている。

A 何より変わったのが、教員が変わったんですよ。
I あ、教員が。先生方。
A あの今年特に教員がああ、O先生の指導の時ずっとメモしとったでしょ。メモしたことを、次のO先生来られるまでに絶対に維持しようっていうことはね、意識

しちよったんですよ。

I すごいですね、でもその先生方のその…。

A 教員のレベルアップがすごくなってるっていう。

I ああ、そうっていただけると…。

A それはね、大きいですよ。

I 先日他の先生も、やっぱりその当然その子どもの指導もありながら、どう音楽をどう指導するかですよ、指導のやり方みたいなものが、先生方にとってすごくあったって感じがする。

A ですよ。だから教員の音楽指導レベルを上げるっていうのが非常に重要ですね。

小学校教員が専門的な音楽指導の困難さを抱える背景として、椎葉・菅 (2019)²⁴⁾ が指摘するように、音楽指導の研究成果が、専門的な音楽教育を受けていない教員にとっては、実際の指導で使えるものとは限らないことが挙げられる。なぜなら、自分のからだで理解するプロセスを割愛して、音楽指導の研究成果を「頭」でしゃべることは、いわば「受け売り」であり (諏訪, 2012)²⁵⁾、個々の子どもの状況によってさまざまな現れ方をする課題に対して教師が対応できず、児童の納得感を喚起することができないからである (椎葉・菅, 2019)²⁴⁾。

このような状況において、音楽アウトリーチの講師が専門家の音楽指導の「こつ」 (諏訪, 2016)²⁶⁾ を示すことで、クラス担任の指導レベルの向上にも貢献していることがうかがえる。先の「(1) 子どもの個人内プロセス」の「知識及び技能に関わる変化」の項でみたように、音楽家が子どもの演奏を実際に模倣し、良い見本と合わせて言語でも説明を加える指導は、まさにクラス担任に指導モデルを示すことにもなっているのである。

さらに、クラス担任も学ぶ側として子どもたちと目的を共有し、クラス集団のモラル (士気) を高め合っていることも指摘できる。子どもの意欲とクラス担任の思いが相乗効果となってクラス集団に良好な影響をもたらしていることがうかがえる。

以上から、音楽アウトリーチの効果を高めるものとして、小学校のクラス担任が音楽指導の困難さを乗り越える重要性を指摘できる。ただし注意

したいのは、これはクラス担任個人の責任に帰すべき問題ではないという点である。クラス担任は、子どもたちの「うまくになりたい」思いを叶えたいと切実と考えている。しかしながら、強い思い (動機づけ) があるにもかかわらず、専門的な音楽指導の困難さという性質も重なり、指導法が十分にわからず、音楽指導に対して自信を持ちにくい傾向がある。それゆえ、音楽アウトリーチによって、専門家の音楽指導の「こつ」 (諏訪, 2016)²⁶⁾ を学ぶことで、音楽指導の指導力と自信を形成する機会が重要な意味をもつのである。

(3) 学校内 (他クラス、教職員) の相互作用

1) 他クラス・他学年との交流促進

A 小学校は、毎年11月に市の教育委員会が主催する音楽祭において、全校児童 (第1学年～第6学年) による合唱と合奏を披露している。それゆえ、音楽アウトリーチにおけるワークショップが、クラスや学年の垣根を越えた相互作用を生み出している。

A 音楽祭っていう目標で、絶対良い演奏がしたいとか、目標に向かって、やっぱそれに向かって皆でベクトルを統一して、最後に指揮者のタクトに集中して高めていくっていうのはできますね。やっぱこう3回全校練習をO先生にしてもらって、やりにゃーいけん、やろうっていう気持ちが高まったね。で、本番に強くなった。本番に。講評が今回はすごく良くて、(中略) 全校でやったのに、大規模校の6年だけがやった合奏みたいな学校があったんだって。うちなんですよ。後で講評で書いてあったんですけど。それぐらいすごい演奏だったという評価をいただいた。(中略) よその校長軍団からもすごいじゃんって言われて。

共通目標が集団に及ぼす意味については、前項「(2) クラス内の相互作用」で確認したように、全校児童で1つの目標に向かって取り組んだ意義は極めて大きいと考えられる。音楽アウトリーチを最大限に活用し、全校児童 (異学年の集合体) が音楽祭という目標に向かってモラル (士気)

を高め、大きな成果をあげられたことが示唆されている。成し遂げた時に、集団凝集性（集団としてのまとまり）が高まり、集団として大きく飛躍できたことで、音楽アウトリーチの成果を高く評価していることがうかがえる。

2) クラス外の教職員との交流促進

A 小学校では音楽祭に全校児童で取り組むことで、子どもとクラス外の教職員との相互作用にも寄与している。

A 表現しよう。表現しよう。それが先生たちからの感想で、「伝わったよ」とかあるじゃないですか、それでまた自分の自信になって技能も高まっていくっていう相乗効果があるねっていうのがあるので。やっぱりそういう面で、子どものできる感が成長したんかな。

A 合奏も良くなかったじゃないですか。で、本番でやってすごく褒めてもらって、いろんな学校の先生たちから褒めてもらって、親から褒めてもらって。

ここでA校長は、クラス外の教職員、さらには保護者が子どもたちの表現を受けとめて評価することで、相互の心が交流するだけでなく、子どもたちの自信と技能がともに高まる相乗効果が生じていることを指摘している。こうした現象を理解する上で有用な枠組みを提供してくれるのが、動機づけ研究で有名な自己決定理論 (self-determination theory) である (Ryan & Deci, 2000)²⁷⁾。この理論では、人間には生理的欲求とは別に、3つの心理的欲求、すなわち、①有能さへの欲求 (need for competence: 環境と効果的に関わりながら自分に能力や才能があることを示そうとする傾向性)、②自律性への欲求 (need for autonomy: 行為を自ら決定して起こそうとする傾向性)、③関係性への欲求 (need for relatedness: 他者やコミュニティと関わろうとする傾向性) が生得的に備わっていると特定している。そして、これらの心理的欲求がすべて成長と人格の統合に向けての生得

的な傾向性であり、3つの欲求が同時に満たされる条件のもとで人は意欲的になり、パーソナリティが統合的 (認知的・人格的・社会的) に発達していくのに対し、満たされないと意欲や心理的な健康が損なわれると主張されている (鹿毛, 2004, 2013; 西村, 2019)^{28) 29) 30)}。

この3つの欲求と音楽アウトリーチの効果の対応関係をみると、有能さへの欲求については、新たな知識・技能、あるいは思考力・判断力・表現力等を獲得して上達し、自信が形成されていくことに関わってくる (A校長のいう「できる感」もこの有能さへの欲求に対応する)。また、自律性への欲求は、音楽への興味が深まったり授業外でも自主的に練習することに関わってくる。3つ目の関係性への欲求が、クラスメートと合奏や合唱で一体感を感じたり、学校の教職員や保護者からほめられることに関係する。つまり、子どもたちが自ら進んで取り組んだ音楽表現活動が本番で成功し (自律性と有能さへの欲求に関係)、子ども同士で喜びを共有したり学校の先生や親からほめられること (関係性への欲求に関係) は、3つの心理的欲求を同時に満たすものとなっている。そして、合奏や合唱によってクラスや学校の雰囲気良好になっていくというのも、この3つの心理的欲求が充足された結果としてもとらえられよう。

3) 学校風土の変化

このように学校内の様々な相互作用が活性化することによって、学校風土が変容していく可能性を秘めている。次の言葉は、音楽アウトリーチと音楽祭によって学校風土を変容させ、学校の教育目標の達成を企図していることをうかがわせる。

A この文化芸術活動って、自分たちが期待してる力っていうのは、うちの学校の教育目標を達成するために、2つの力、人間力・協創力の向上というのが出てるんですけど。

I 人間力と協創力。

A 協力の協に創造するの創。これの向上に非常に役立つと思って、人間力はやっぱりこう本物から学び、本物を学ぶちゅうことで。やっぱり一人の人間として上を目指そうとかね、高まるうとか、それとか頑張るとか、いろんな人間としての力

を。

A 小学校の教育目標を達成するための2つの力として「人間力」「協創力」の向上が挙げられ、音楽アウトリーチがそれらの向上に貢献できると評価している。このようにA校長は、学校目標を達成するための手段として、音楽アウトリーチを積極的に活用しているのである。

また実際に、学校外の教育関係者からも音楽祭後に学校が「落ち着いている」「ぎすぎすしていない」といった評価を受けている。

A 1年の中で県教委が2回訪問するんですけど、全部学校を見に行くんですよ。学校の状態がどうなのか。教職員の様子はどうなのか。(中略)で、見たらわかりますよね。全部の学校回るわけだから。今年初めてです、ほんとに今年。この秋に音楽祭の後に来たんですよ。「本当に落ち着いちゃうね」って子どもが。(この地区)の子どもがね、落ち着いてる。(中略) 本当にお互いの音を確認しながら、みんなで良いものを作っていくということを2ヶ月やって成果が出たんじゃないかなあと思って。ぎすぎすしてないって言うんですよ。

これに続けてA校長は、学校が落ち着いた要因を次のように分析している。

A これ2ヶ月を、知らないうちにそういう、何ていうんですか。やっぱお互いを大事にしなきゃいけないとか、そういう気持ちが自然とついたのかなあと思ってですね。
I 思いやりとか。
A そう。
I お互いに他人を尊重する。
A そうなんです。それが、年2回しか来ない人が見て、感じたっていうんだから、原因はそこかかっていう。日々、毎日練習するじゃないですか、最低1回は。そんな感じで、本当に相手を思う力、自分を伝える力、ていうのが自然に音楽を通

してついたのかなあっていう有り難さを感じております。

つまり、学校の風土に良好な変容をもたらした要因について、音楽祭に向けて学習する中で、「相手を思う力」「自分を伝える力」が自然に身についたというのである。自己決定理論の提唱者のDeciも、「真の自己は自律性と関係性の両傾向を備えているため、よく発達した自己にもとづいてふるまう人は、他者とその環境に対して前向きな姿勢をとるのと同様に、他者を受容し、その環境を尊重する」と述べており (Deci & Flaste, 1995)³¹⁾、合奏を通して3つの心理的欲求をバランスよく満たされた子どもたちは、自分を発揮すると同時に他者を尊重する姿勢を形成し、それが良好な学校風土につながったと考えることができよう。

(4) 家庭・地域との相互作用

1) 子どもと保護者のコミュニケーション促進

音楽アウトリーチの影響は学校内にとどまらない。A校長は子どもと保護者とのコミュニケーションを促進することを次のように指摘している。

A 家でのコミュニケーションが出来るんですよ。親子の会話がね。
I そこにまたコミュニケーションが生まれるわけですね。
A 家の中で晩御飯食べながら、こんなことしたんよとか、しゃべるじゃないですか。
I ええ。
A 親子の心の懸け橋になってるなっていうのはあります。
I はあー、そこだけじゃないんですね。
A 家でしゃべる。
I 出来事をしゃべる。
A しゃべる。それで特に低学年は鍵盤ハーモニカをかみならず持って帰ったので、あの次の日の。で、家で弾いて見せるわけですよ。そんなら、親子でのまた練習にもなって、「そんなこと出来るん。」とか言いながら、これは、
I コミュニケーションが生まれる。
A 親子で話ができるので、心も豊かになりますよね。

- I そうですね。
 A ええ。何かそういう感じで、やっぱこのプロに学ぶちゅうのは、家での心も豊かになる。コミュニケーションも豊かになり、ご飯も美味しくなる。
 I はい。
 A で、親も「やってみ」とか言うから、弾くとかね。

さらに親子のコミュニケーションが充実することで、心が豊かになるとも語っている。プロの演奏を鑑賞したりプロから表現指導を受けたりすることは、子どもにとっては普通の学校生活にはない特別なこととなり、家庭内でのコミュニケーションを促進させるのである。このように体験談や感想を家族と親密に語り合うことは、文部科学省(2018)¹⁰⁾の新学習指導要領で重視されるようになった「言語活動の充実」を促進している点においても重要な意味をもつ。

また、低学年の子どもが家で保護者と一緒に鍵盤ハーモニカを練習していたように、音楽の学習において、特に学習初期段階にある子どもは親からのサポートが重要な役割を果たすことが指摘されている(Barry & Hallam, 2002)¹⁶⁾。保護者の熱心な興味は、子どもの自信、動機づけ、持続性を蓄積させ(McPherson, Nielsen, & Renwick, 2013)¹⁵⁾、子どもの音楽学習活動を促進させる点においても極めて重要なのである。

ここでA校長は、親子の「コミュニケーションも豊かになり、ご飯も美味しくなる」と語っているが、これも自己決定理論から解釈することができる。すなわち、食事場面で子どもにとって自分が興味を持ってできるようになったこと(自律性と有能さへの欲求)を親にほめられる(関係性への欲求)ということは、3つの心理的欲求と同時に生理的欲求(食欲)も満たされることを意味している。さらに、これが家族の至福の時間として子どもの心に刻まれ、まさに心が豊かになることにつながっていくととらえられよう。

2) 学校と家庭・地域との連携強化

音楽アウトリーチが、子どもと保護者間だけでなく、学校と保護者間のコミュニケーションの機会となっていることも指摘されている。

- A 親からいろんな反応があって、芸術活動の後。子どもがやっぱ家でしゃべってるんだらうなどと思って。
 I ああそうですか。
 A 「先生、昨日子どもがね、すげー喜んじやったよ。」とか「〇〇が楽しかったよ。」とか、帰ってしゃべってる。で、良いかなというのと。あとこっちが今回努力したのは、〇先生が来られる2日前には、〇先生が来られるので見に来ませんかっていうメールを流すと、家での会話がある。

ここで特筆すべきは、学校と保護者とのコミュニケーションは自然に発生したものではなく、A校長の意図的なアプローチの結果にあるという点である。A校長は学校と家庭・地域とをつなぐために音楽アウトリーチを意図的に活用し、電子メールで家庭に情報配信をするなど率先して仕掛けていることが確認できる。これによって、音楽祭などの学校行事の教育的機能(河本, 2012)³²⁾を高めるだけでなく、学校と家庭・地域との連携強化にもつながっているのである。

先にも引用した次のコメントからも、A校長が音楽祭のタイミングを意図的に活用していることがうかがえる。

- I ということは、やはりその音楽祭があるからこそやっぱり、タイミングが
 A 目的があるから、文化芸術活動を音楽祭の前に持ってくるという価値はすごく高いと思いますよ。

音楽アウトリーチはやみくもに実施すれば効果があるというのではなく(梶田, 2010)³³⁾、学校側の主体性や能動性がその効果に深く関与しているのである。その帰結として、ドラマのような場面にまで至っている。

- A 親が終わってからも帰らず、バスがみんなで見送りやったんですよ、出待ちしてくれて。

- I ヒーローじゃないですか。
 A そうそう、子どもたちもね、やっぱ、親も感動した。
 I 親は平日でもちゃんと、
 A 全員ほとんど。

このように多くの家庭を巻き込んだ行事になることで、学校と家庭・地域との連携を深めていることがうかがえる。

従来、音楽アウトリーチの問題点として、専門家が自分のやり方を一方的に押しつけたり、教師が音楽家に丸投げしたりなど(城間・茂呂, 2007)³⁴⁾、実施主体から学校へ一方通行となっている方向性や学校の受け身の姿勢(梶田, 2010; 吉本, 2013)^{33) 3)}が指摘されてきた。これに対してA校長は、音楽アウトリーチがより高い効果を発揮できるように音楽家と綿密に対話を深めながら、学校内外に積極的に働きかけている点も、その成功要因として指摘できる。

3) 地域の文化レベルの向上

A校長は、音楽アウトリーチの効果が学校内にとどまらず、子どもが育つ地域の文化レベル向上にもつながっていくと指摘している。

- A 自分の本心はですよ、本物に学ばにやいけん、本物を学ばないといけんって、子どもに言うんですよ、教員にも。(中略)あとは、こんな田舎の学校に来てもらえるっていうのは、超有り難いです。機会がないので。ホールも無い。無いですよね。

音楽アウトリーチは、特に地方の学校にとっては、本物に触れる貴重な機会になり得ると高く評価している。

さらに、音楽アウトリーチの実践の場として、「学校」という公教育の場で行う意味についても次のように述べている。

- I 学校でやることにすごく意味がありますね。
 A 意味がある。そう。

- I 学校がやるっていうことが。これがその地域の文化会館がやったところで、
 A 行かないんだから。
 I そこに来てくれないんだったら、やったって意味がないですよ。
 A 去年うち、学習発表会でO先生にやっってもらったじゃないですか。
 I はい。
 A ああいう音を、地域の人とか親が聞くことも本当にない。
 I 聞きたくても無いってことですかね。機会がない。
 A 機会もないし、聴きに行こうとも思わない。そういう機会がないから。
 I 知らないからね。
 A 知らないから。良さを。
 I 良いってことを。
 A 良さを知らないんで。無理矢理でもこういう地域は与えないといけないかなって。
 I 機会を与える。
 A 与える。それが文化芸術活動の1つのなかなって思って。田舎は特に必要だなあって思います。で、これでまた子どもの親も良いなあって思って、一人でも二人でも行こうって子どもが、家が増えれば、土気も高まっていきますよね。

地方では、都市部に比べると音楽演奏会の公演数が少ない。さらに、たとえ開催されたとしても、子どもがそれを享受できるかは保護者次第である。それゆえ、学校という誰もが平等に教育を受けられる場で音楽アウトリーチを実施することに大きな意義が存在し、地域の文化を支える貴重な資源の1つとなっていることが示唆されている。

(5) 音楽アウトリーチの継続性の意義

調査内容②「音楽アウトリーチ全般に対する学校長の意識」については、効果そのものではなく、音楽アウトリーチのあり方に関わる内容である。

従来の研究においても、アウトリーチは単発的なプログラムよりも継続的なプログラムがその効果を高めるとくり返し指摘されており(林, 2013; (財)地域創造, 2010)^{35) 5)}、A校長も継続性の意義を次のように語っている。

- A 本当こういう活動は単年じゃなくて継続ですね。
- I 継続ですね。
- A 継続が大事と思います。
- I 継続するからこそ、先生がおっしゃる信頼感。
- A そう、信頼関係と、本当に子どもが予想して楽しめるというか。見通しを持って音楽、この芸術活動に臨むのと、全然知らなくていきのと、やっぱりこう深まりが違うじゃないですか。子どもが期待感を持って、きっとこれがあるんじゃないかなあって思って音楽室に入るの、違うんですよ。(中略) それやっぱり一度やってないとわからないと思いますよ。子ども見ちゃって分かりました。2年目だからこそというのが、ようわかりました。2年目だからこそ。

音楽アウトリーチを継続することで子どもたちと講師との間に「信頼関係」が構築されるとともに、参加する際の心構えにも影響することが示唆されている。

- A O先生に1年2年と続けてやってもらうことで、信頼しているんですよ、子どもが。(中略)
- A 今年やっぱり2年目で、去年すごく上手いって、歌えなかった人たちが、「大切なもの」(筆者注:曲名)が良くなっていることと、あのね、合奏も良くなかったじゃないですか。で、本番でやってすごく褒めてもらって、いろんな学校の先生たちから褒めてもらって、親から褒めてもらって。そういう信頼できる先生に教えてもらえるってということで、やっぱりね、信頼関係が大きいのかなあと思って、O先生との。(中略) 自分が本当に出来たっていう充実感、有用感。それがやっぱり1年間残っちゃうんだなって、子どもの中に。じゃけーO先生が前に立たれただけで変わるんですよ。

信頼できる講師(音楽専門家)と再会することで、子どもたちが過去の成功体験をもとに、さらなる向上を期待し、音楽に対して意欲的に取り組む姿勢として表れていると考えられる。

4. まとめと今後の課題

本研究では、音楽アウトリーチが子どもに及ぼす効果について、学校長1名の面接データをもとに検討した。その結果、音楽アウトリーチが子ども個人だけでなく、クラス集団や学校全体、さらには学校と地域社会の連携といった学校外にまで様々な肯定的な影響をもたらしていることが示唆された。

また、従来指摘されてきた音楽アウトリーチの学習指導要領における位置づけの問題(伊志嶺, 2018)⁴⁾についても、次の2点から音楽科の授業として十分に成立する教育的意義が確認された。

- ①音楽的アウトリーチには音楽科の3つの資質・能力すべてにわたって効果がみられるだけでなく、その後の音楽科の授業にも肯定的な影響がみられる。
- ②音楽アウトリーチが子ども同士の相互作用を促進し、学級風土の変容にもつながる性質を備えているため、「主体的・対話的で深い学び」の観点からも高く評価できる。

一方で、音楽アウトリーチをやみくもに実施すればよいのではなく、学校側の主体性や能動的な働きかけが重要であることも示唆された。たとえば音楽家に一任するのではなく、学校長が自ら率先して様々な学校行事と有機的に結びつけていくことが、その効果をより高めるために極めて重要であると考えられる。林(2013)³⁵⁾が指摘するように、教師の工夫ひとつでアウトリーチの充実度が変わってくるのである。

本研究の限界と課題については4点挙げられる。まず1点目は、成功した単一事例のみに焦点をあてていることである。A校長は音楽アウトリーチを前任校において経験し、活用方法を熟知した上でA小学校に導入・継続するとともに、自身でも主体的に様々な働きかけをおこなっている。これまでに全く音楽アウトリーチを導入していない学校や、期待した効果が得られなかった事例など、多様な事例について検討する必要がある。

2点目に、過疎地の小規模校を対象にしていることである。全校児童数が中規模・大規模校の1

クラス分にも満たないため、学校全体がコンパクトにまとまりやすく、知見の一般化には一定の限界がある。そこで、中規模・大規模校を対象にした知見と比較し、それぞれの個別性と共通性について検討する必要がある。

3点目に、小学校の音楽祭に向けての取り組みのみを対象としていることである。たとえば中学校におけるクラス対抗の合唱コンクールなどの学校行事、吹奏楽コンクールなどの学外イベントなど、多様なゴールに向けた取り組みを通して集団が変容していくプロセスやメカニズムについても検討が必要である。

4点目に、本研究では音楽アウトリーチの講師のはたらきかけについては、ほとんど触れていない。講師のはたらきかけが子どもの動機づけや子ども集団のグループダイナミクスに大きく関係していると考えられることから、講師と子どもとの間で交わされる相互作用について詳細に検討することで、さらなる知見が期待できる。

注

- 1) 「文化芸術による子供育成総合事業」の詳細は <https://www.kodomogeijutsu.go.jp/> (2021.1.11)

引用文献

- 1) 上村有平・小野隆洋(2021). 音楽アウトリーチが子どもに及ぼす効果——感想文の分析から—— *山口芸術短期大学紀要*, 53, 15-27.
- 2) 赤木 舞(2014). 音楽分野の教育プログラムに関する一考察——文化庁「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」を中心に—— *音楽芸術マネジメント*, 6, 87-92.
- 3) 吉本光宏(2013). アウトリーチから始まる日本の未来——音楽教育にとどまらないインパクトとポテンシャル—— *音楽教育実践ジャーナル*, 10(2), 14-20.
- 4) 伊志嶺絵里子(2018). 小学校における音楽アウトリーチの有用性について——『学習指導要領』における観点から—— *音楽芸術マネジメント*, 10, 65-76.
- 5) (財)地域創造(2010). 「文化・芸術による地域政策に関する調査研究」報告書 新 [アウトリーチのすすめ] ——文化・芸術が地域に活力をもたらすために——
- 6) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株) (2020). 令和元年度 文化芸術による子供育成総合事業に関する調査研究 報告書
- 7) 小野隆洋(2020). 鑑賞と表現を融合した活動が児童の音楽に対する態度に与える影響——アンケート調査及び半構造化面接に基づいた考察—— 2019年度山口学芸大学大学院教育学研究科修士論文(未公開)
- 8) Bronfenbrenner, U. (1979). *The ecology of human development: Experiments by nature and design*. Harvard University Press. (ブロンフェンブレンナー, U. 磯貝芳郎・福富 譲(訳) (1996). 人間発達の生態学——発達心理学への挑戦—— 川島書店)
- 9) 川喜田二郎(1967). 発想法——創造性開発のために—— 東京: 中央公論社
- 10) 文部科学省(2018). 小学校学習指導要領 文部科学省
- 11) 久保田慶一(2019). 新しい音楽鑑賞——知識から体験へ—— 東京: 水曜社
- 12) Renninger, K. A., & Hidi, S. (2016). *The power of interest for motivation and engagement*. New York: Routledge.
- 13) 田中瑛津子・市川伸一(2017). 学習・教育場面における興味の深化をどう捉えるか——鼎様相モデルによる諸研究の分析と統合—— *心理学評論*, 60, 203-215.
- 14) 林 睦(2002). 学校教育における音楽家活用の調査研究 *文化経済学*, 3(1), 85-90.
- 15) McPherson, G. E., Nielsen, S. G., & Renwick, J. M. (2013). Self-regulation intervention and the development of music expertise. In H. Bembenutty, T. J. Cleary, & A. Kitsantas (Eds.), *Applications of self-regulated learning across diverse disciplines: A tribute to Barry J. Zimmerman* (pp.355-382). Information Age Publishing. (マクファーソン, G. E.・ニールセン, S. G.・レンウィック, J. M. 解良優基・中谷素之(訳) (2019). 自己調整介入と音楽における熟達 ベンベヌティ, H.・クリアリー, T. J.・キトサントス, A. 中谷素之(監訳) 自己調整学習の多様な展開——バリー・ジーマンへのオマージュ—— 東京: 福村出版)
- 16) Barry, N. H., & Hallam, S. (2002). Practice. In R. Parncutt & G. E. McPherson (Eds.), *The science and psychology of music performance*:

- Creative strategies for teaching and learning* (pp.151-165). New York: Oxford University Press.
- 17) McPherson, G. E., & Renwick, J.M. (2011). Self-regulation and mastery of musical skills. In B. J. Zimmerman, & D. H. Schunk (Eds.), *Handbook of self-regulation of learning and performance* (pp.234-248). New York: Routledge. (マクファーソン, G. E.・レンウィック, J.M. 佐藤礼子(訳) (2014). 自己調整と音楽スキルの熟達 ジマーマン, B. J.・シャंक, D. H. 塚野州一・伊藤崇達(監訳) 自己調整学習ハンドブック 京都: 北大路書房)
- 18) 瀬尾美紀子(2016). 仲間との協同による学習 自己調整学習研究会(監) 自ら学び考える子どもを育てる教育の方法と技術(pp.97-111) 京都: 北大路書房
- 19) 寺澤洋子・星(柴)玲子・柴山拓郎・大村英史・古川 聖・牧野昭二・岡ノ谷一夫(2013). 身体機能の統合による音楽情動コミュニケーションモデル *認知科学*, 20(1), 112-129.
- 20) 杉江修治(2013). 協同による教育実践の創造 中谷素之・伊藤崇達(編) *ピア・ラーニング——学びあいの心理学——*(pp.173-186) 東京: 金子書房
- 21) Bass, B. M. (1962). *Orientation inventory*. Palo alto: Consulting psychologist press.
- 22) 赤坂真二(2013). *スペシャリスト直伝! 学級を最高のチームにする極意* 東京: 明治図書出版
- 23) 上村有平(2018). 保育学生の主体性・協調性を引き出すグループづくり——卒業研究におけるグループワークへの心理学的アプローチ—— *山口芸術短期大学研究紀要*, 50, 11-21.
- 24) 椎葉亜加利・菅 裕(2019). 小学校音楽科教育における歌唱指導に関する実践的研究——からだメタ認知を通じた教師の働きかけと児童のスキル獲得—— *宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター研究紀要*, 27, 33-46.
- 25) 諏訪正樹(2012). "からだで学ぶ"ことの意味——学び・教育における身体性—— *Keio SFC Journal*, 12(2), 9-18.
- 26) 諏訪正樹(2016). 「こつ」と「スランプ」の研究——身体知の認知科学—— 東京: 講談社
- 27) Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55, 68-78.
- 28) 鹿毛雅治(2004). 「動機づけ研究」へのいざない 上淵 寿(編) *動機づけ研究の最前線* (pp.1-28) 京都: 北大路書房
- 29) 鹿毛雅治(2013). *学習意欲の理論——動機づけの教育心理学——* 東京: 金子書房
- 30) 西村多久磨(2019). 自己決定理論 上淵 寿・大芦 治(編) *新・動機づけ研究の最前線* (pp.45-73) 京都: 北大路書房
- 31) Deci, E. L., & Flaste, R. (1995). *Why we do what we do: The dynamics of personal autonomy*. New York: Putnam's Sons.(桜井 茂男(監訳) (1999). 人を伸ばす力——内発と自律のすすめ—— 東京: 新曜社)
- 32) 河本愛子(2012). 日本の学校行事に関する教育心理学的展望——その教育的機能および発達の意義を問う—— *東京大学大学院教育学研究科紀要*, 52, 375-383.
- 33) 梶田美香(2010). 地域全体を対象にしたアウトリーチを目指して——小学校へのアウトリーチを参観した保護者の変容から—— *音楽芸術マネジメント*, 2, 99-104.
- 34) 城間祥子・茂呂雄二(2007). 中学校における専門家とのコラボレーションによる和楽器授業の展開過程——「参加としての学習」の観点から—— *教育心理学研究*, 55, 120-134.
- 35) 林 睦(2013). 音楽教育におけるアウトリーチを考える——基本的な考え方、歴史的経緯、最近の動向—— *音楽教育実践ジャーナル*, 10(2), 6-13.

付 記

本研究は2020年度山口芸術短期大学特別研究助成を受けて行われました。

